

「悲しみを乗り越える家族の『再生』を感動的に描いている」

突然の息子の死で、ショックのあまりその記憶を失った母親。家族は息子が外国で生きていると嘘をつくが……。家族の再生をユーモアたっぷりに描く『鈴木家の嘘』が本日16日から全国公開された。「優しい嘘」は家族をどう変えたのか。解剖学者の養老孟司さんが語る。

家族の右往左往を

コミカルに描写

この作品には真実がありませんね。リアリティという意味じゃない。真善美。より真であり、善であり、美しいということです。人が死ぬということは、実は自分のことではありません。家族の問題です。死



んだ本人は存在しないわけですから、自分の死は「ない」に等しい。死によって変わるの周囲です。一方で、無関係な他人の死には、意味がありません。死は自分という一人称でもなく、

他人という三人称でもない。二人称的な関係の中でしかあり得ない。この映画は、死が二人称であることを、きちんと描いています。引きこもりの長男が死にますが、母親はショックのあまり、その死自体の記憶を無くしてしまう。父親や長女らは、長男が生きている外国で暮らしていると嘘をつき、みんなでアリバイ作りをする。それは母親への善意でもあり、愛情でもあります。本当は、母親もその家族も、なぜ人が死ななければならぬのか、納得できないわけなんです。

僕はコリーヌ・セローの喜劇が好きなんです。この作品も、家族の右往左往をコミカルに描いています。フランス映画と違い、ちよつと重いんですが、日本映画的な向き合い方で、誰もが共感できると思います。しかも、ハッピーエンドになっていない。このテーマで、よく作ったなと思いますよ。

家族は長男の死を認めたくないの、嘘をつく。死という事実を「抑圧」するのですが、僕にも「抑圧」の体験があります。

「“死”は本人ではなく、家族にとっての問題」

自身の体験と重なる

「否認から受容」の物語

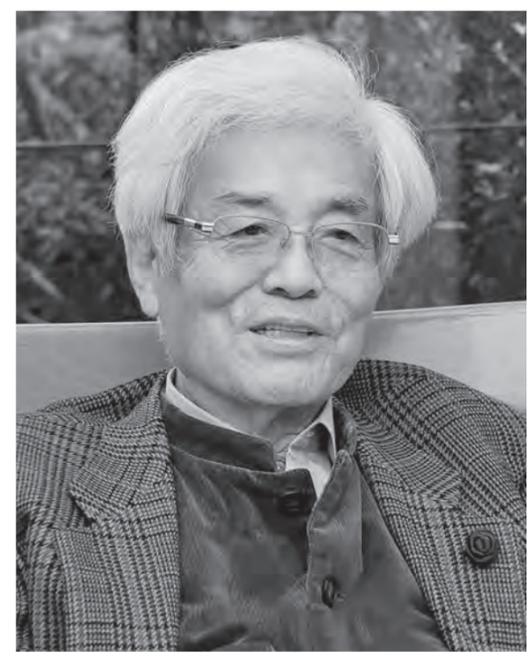
5歳の誕生日直前に、父親が結核で死にました。僕の人生は、その思い出から始まっています。自宅で夜中に起こされて、大人たちがベッドの周りに並んでい



る中、寝ている父親に、「さよなら」と言うように言われました。でも、言えなかった。じつと顔を見ていたら、父親は咯血して、それで終わりです。その後、僕は他人にあいさつができなくなりました。幼い僕にとって、父親の死は理不尽でした。死を認めたくないから、さよならと言わなかった。他人にあいさつをすることは、僕の中では父親の死を認めること

です。この作品も否認から受容のドラマです。コメディですが、家族の再生と成熟が描かれているから、感動的なのでしょう。

43歳の野尻克己監督の初監督作で、ご自身も兄を亡くされた体験があり、それをもとに物語を作られたと聞いて、納得がきました。現代の情報化社会の中では隠されている死というものが、一生懸命、誠実に向き合っている。監督にとっても、映画を作ることが、家族の死を受け入れることだったのだと思います。



養老孟司さん

ようろう・たけし 1937年、神奈川県鎌倉市生まれ。解剖学者、東京大学名誉教授。ベストセラー『バカの壁』をはじめ、『唯脳論』『からだの見方』『養老訓』など著書多数。昆虫採集など趣味は幅広い。

とになっていたのです。僕は40代の時、突然それに気づいて、地下鉄の中で泣き出してしまいました。父親の死を認めたことで、僕は変わった。別な人生が始まりました。人間は変わる。自分が変わると世界も成熟というんで

物語

ある日突然、鈴木家の長男・浩一が世を去る。ショックのあまりその記憶を一時的に失ってしまった母親のために、父親と長女は嘘をつく。「引きこもりだった浩一は家を出て、アルゼンチンで働いている」と。母の笑顔を守るため、親戚たちも巻き込んだ偽装工作が始まるが……。

鈴木家

岸部一徳
父・幸男
浩一と正面から向き合わずにいたことを後悔している。

原日出子
母・悠子
浩一のことを誰よりも愛して、身の回りの世話をやく。

加瀬亮
長男・浩一
繊細な性格で引きこもり生活を長く続けている。

木竜麻生
長女・富美
大学生。亡くなった兄になりすまして母に手紙を送る。

岸本加世子
叔母・鈴木君子
幸男の妹。冠婚葬祭会社を営む社長。

大森南朋
叔父・吉野博
悠子の弟。さまざま海外事業に手を出す風来坊。